

## コハクチョウの故郷

澤田雪野

1968年11月盛岡市の高橋三太郎さんが、雫石川の柳の繁るよどみの中をかくれるようにしている2羽の白鳥を、初めて発見した。当時、望遠レンズを持っている人は少なく、動きの早い白鳥の写真を撮るのは容易でなかった。

私も純白の美しい白鳥の写真を撮りたくて、寒い冬の川によく行った。毎年二科会の写真展の入賞をねらっていましたし、日本から何千キロも離れたところから、純白の羽根に命を託し、11月に渡来して春3月に生まれ故郷に帰って行く、自然界の不思議なロマンに、是非一度その地をたづねてみたいと思い始めてから25年、やっと今回シベリア北極圏バードウォッチングに参加することができました。(写真1)

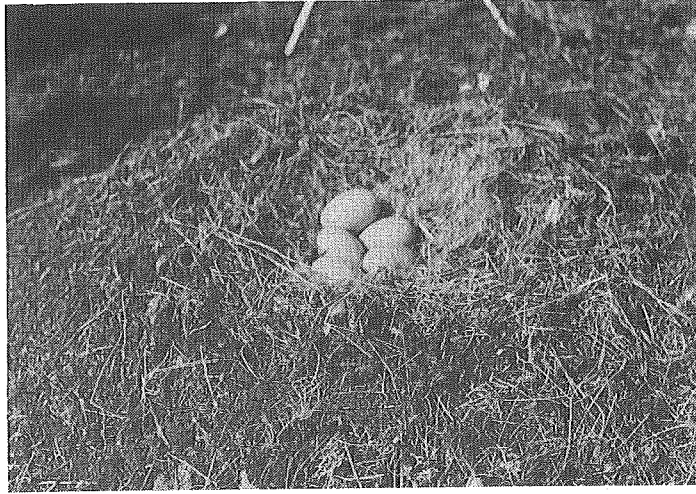


【写真1】

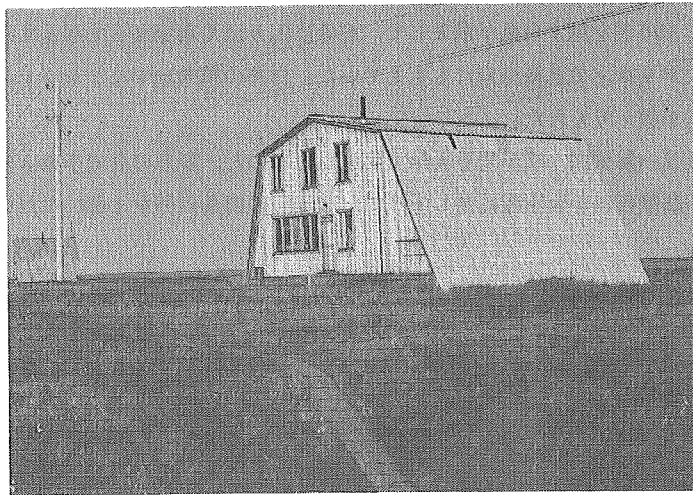
訪れた白鳥の繁殖地では、抱卵中5個の巣(写真2)と2羽の成長を見た、5羽の雛を連れて7羽一家族をしっかりと見ることができました。巣の周囲はスズメノカタビラ、スズメノテッポウ、クレソウなどの生えている広大なツンドラ湿原の中で雛鳥を見つけたときは、あまりの嬉しさに「コイ・コイ・コイ」と呼んで見ましたが、草の中にかくれてしまいました。

道路のないツンドラに住む人たちは、舟やヘリコプターを交通の手段としていた。私たち一行14名と瓢湖白鳥の会の方4名、新潟のテレビ局の方3名とツアーの添乗員2名は、新潟空港からハバロスク、マガダン、アナドーリ空港と飛行機を乗りついで、ベベック空港からヘリコプターでマガダン州立北方生物問題研究所のチャウンステーション(写真3)に着いて、ここで研究者の皆さんにお世話になった。

ヘリコプターが低空で探しても、なかなか見つけることができなかった繁殖巣をロシア人の博士の案内で見ることができました。ツンドラとは深い水面の上に浮かんだ草の根のかたまりと考えればよいであろうか、深みに落ちないように、博士の足跡のとおり歩くことの注意と、独り歩きは危険で、深みに



【写真2】

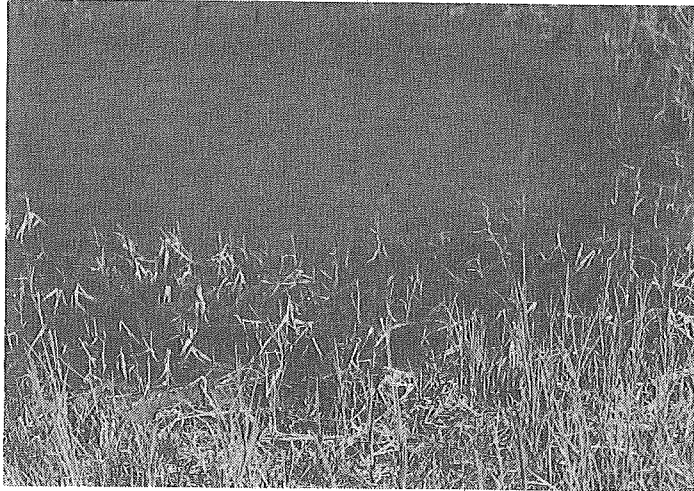


【写真3】

落ちて沈むと助けることができないとのことであった。

背丈が1センチほどの草花が美しく咲いて、果てしない大地に立つと、とても素晴らしい。赤がね色の沼(写真4)、潮の干上がった真っ白い泥の上には鳥や動物の足跡が見られた。上空から見ると美しい。ここでは蚊の大群である。全員が膝までの長靴、蚊に刺されないように網をかぶり、皮手袋と少しでも肌が見えるところぶができたように腫れあがり、痛くてかゆい。陽がさすと息もできないほどの蚊の大群であるが、北極風が吹くと寒くなりふっといなくなる。

ここは、厚いダウンジャケットを着て、何枚ものズボンをはいても寒い。しかし、平らに見えてもツンドラは、やわらかで、足が沈み歩くと汗だくになる。ここでの衣類は汗のしみない純毛が良いと



【写真4】

の注意があったが、その通りである。ここが白鳥の故郷であった。7月中旬なのに卵であるものが、9月中旬の旅たちに間にあうのであろうか、そんな心配をしながら卵を持って見た。

高松の池に始めて300羽を越す白鳥が飛来して、えさに困りはて草を刈って与えてみた、たくさん食べたその草はコスモポリタンで北極海岸にも生えていた。白鳥の繁殖地ではクレソンの根を食べることをロシア人の鳥学者が教えてくれた。

研究者に白鳥のカラー解剖図、私が岩手大学で実施したものと、野鳥の会岩手県3支部会員が撮影した動物、鳥類の岩手鳥獣百科をお土産に差し上げて、2年前の白鳥の卵を1個いただいできました。